

東海理化フォローアップ研修会(2008.9.25) 衣川

- 1) 下にあるリストから話題を選んで、やりたいことのキーワードを箇条書きにしてみてください。
リストにない話題でもかまいません。

今年中にやりたいこと・今度のやすみにしたいこと
趣味でやってみたいこと・今日これからやりたいこと
日本語パートナーとしての希望 仕事上の希望
来年の希望・予定 将来の希望・予定

- 2) できるだけリストを充実させてください。一つ、考えたら「それから」、「その後で」、「そのために」とリストを続けてください。
- 3) ある程度出来たら、それを周りの人に話してみてください。話しているうちに思いついたらまたリストに加えてください。
- 4) 一度話したら、今度は隣の人に話してみてください。
- 5) 今度は、同じ話を「東海理化の教室」に来ていた外国人の人に話すつもりで話してみてください。聞いている人は、学習者になったつもりで、わからないと思ったらわからないような顔をしてください。話し終わったら、今度は話し手が変わって同じことを繰り返してみてください。

1) ことばを身につける過程とは

- ・ インプット(聞くこと)の重要性(気づき・理解できるインプット)
 - 「自分が言えなくても、こう言えるんだ」という 80% ぐらい内容が理解できるインプットにある程度浸ることが必要。そのなかから 10% でも「あ、これは言える」とか「あ、これは自分も使いたい」と思えばいい。
 - 「ナチュラルスピードでとにかくたくさん聞けばそのうちわかるようになる」ことは絶対にない。「要支援」的なインプットが必要。
- ・ 仮説を作る(こう言えばいいのかな? 「だった」は過去)
- ・ アウトプットしてみる(よし! 言ってみよう)
 - それで通じれば仮説が正しいということになる。実際の場面で「通じた」ということは習得に繋がる最良の薬。
 - もちろん、ある仮説が別の場面で通じるということは保証されない。通じなければ、仮説を訂正したりする必要がある。仮説ができなければ、さらにインプットを増やしたり質問する。
- ・ 相互のやりとりを繰り返す
 - 相互の「伝えたいこと」をやりとりすることは、外国人にとってはインプットとアウトプットの機会を増やすことができる。日本人にとっても「こういえば通じるのかな」という仮説作り、その仮説検証ができる。
 - そのためには、本当に「伝えたい内容」を「伝える」ことが必要。与えられた内容を話すのではなく、自分が話したいと思うことを言葉に変えて、それを相手に伝えること。または、相手が伝えたい内容を理解すること。
 - 試行錯誤が重要 → 0-1 レベルの人とのコミュニケーションは大変。かつ時間がかかるし、交換できる情報はわずかしかない。しかし、それが当然。最初の一歩(ちょっと話せるかな)までは本当に大変だが、それをすぎると比較的初歩までは進みやすい。最初的一方を breakthrough 出来ない人多い。

2) 従来の教育との比較において

狭義の日本語教育(学校型)	広義の日本語教育(地域型)
教師-学生	学習者-支援者・援助者
教える・習う上下関係・権力性	必要な知識を共有する水平関係
一对多	一对一/多对多
日本語学校・大学・教育機関	日本語教室・プライベートレッスン・友人
画一的・計画的	個別性・多様性・非計画的
集中型	分散型

教科書使用・文型積み上げ・場面積み上げなどの教育が効果を上げてきたか？

- 集中型の授業形態で結局「雑談等」の話す機会が多いから、習得できたのではないか。週1回1時間～1時間半では習得は期待できない。
- 文型を積み上げていっても、習得される文型はまったくその積み上げとはまったくと言っていいほど関係がない。習得しやすく利用価値の多いもの。
- 学生は本当に伝えたいことを話すときには「英語」を使う。なぜならば「本当に伝えたい」から。場面を設定しても、ロールプレイを設定しても「本当に伝えたい」という気持ちにはならない。あくまでも擬似的なコミュニケーションでしかない。擬似的なコミュニケーションしかしていない人は本当のコミュニケーション場面ではコミュニケーションできない。
- 実際のコミュニケーションの場を教室に作る。あるいは実践の場を教室に持ち込むことが必要。

3) 日本語パートナーとは？

- ・ 正しい日本語を教える(又は指導する)教師ではなく、日本語で真のコミュニケーションを行うパートナーとして、日本語学習者と接する。
- ・ 教えるという立場ではなく、ともに学ぶという姿勢が大事。(要支援的な話し方とは)
- ・ 日本語を使う機会を多く与える。学習者は使う過程で試行錯誤しながら理解し、その結果、日本語を使う技術を身につける。

4) 教室活動の流れ(改訂版)

1. 教材記入+個人レベルでの内容活性化
2. グループ活動としての内容の活性化
3. 到達目標となるコミュニケーション行動モデル提示(教室活動が終了した時点での到達目標を示す)
4. グループ・ペアワークモデル提示(パートナーとのやりとりを示す)
5. グループ・ペアワーク
6. ミニ意識化を行う。疑問点・まとめで必要な部分は次のペアに移る前に
7. グループ・ペアワークモデルの拡大版の提示
8. グループ・ペアワークを繰り返す
9. 到達目標となるコミュニケーション行動を行う。